



TITLE:

京大広報 No. 745

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 745. 京大広報 2019, 745: 5272-5296

ISSUE DATE:

2019-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/244662>

RIGHT:

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY

2019.9
No. 745



目次

[大学の動き]

- 名誉教授懇談会を開催 5273
- 第6回京都大学－稲盛財団合同京都賞シンポジウムを開催 5273
- 令和元年度京都大学創立記念行事音楽会を開催 5274
- 令和元年度「京都大学総長賞」表彰式を挙行政 5275
- 「京都大学機械研究会」が山極総長および川添理事・副学長を表敬訪問 5275
- 第58回全国七大学総合体育大会（七大戦）の開会式が行われる 5276

[部局の動き]

- 教育学部創立七十周年記念行事を開催 5277
- 第23回リカレント教育講座『心の教育』を考える－多職種・多機関の連携－を開催 5278
- 第20回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催 5279
- 総合生存学館（思修館）に凸版印刷アートイノベーション産学共同講座を設置 5280
- 総合生存学館（思修館）がリップル社とブロックチェーン・暗号資産の学術研究のため提携契約を締結 5281
- 総合生存学館（思修館）において欧州復興開発銀行総裁を迎え、国際教育セミナーを開催 5282

- サイエンスアゴラ in 京都・京都大学「超」SDGs シンポジウム「資源・エネルギーと持続可能性」を開催 5283
- 高大連携事業「京大 森里海ラボ in 芦生」を実施 5284
- 高等研究院 iCeMS が、台湾中央研究院と合同シンポジウム・台湾オフィス開設セレモニーを開催 5286

[寸言]

- 「新人類の皆さんへ」 乗京 正弘 5289

[随想]

- ビッグデータ学習とAI－レンブラントの次回作－ 5291
- 名誉教授 田中 克己

[洛書]

- 医学研究科に学内異動して 竹内 理 5292

[話題]

- 令和元年度総長杯（卓球大会）を開催 5293
- 北部構内「子ども見学デー 2019」を開催 5293

[訃報]

- 森岡 茂樹 名誉教授 5295
- 渡部 良久 名誉教授 5296



京都大学



大学の
動き

名誉教授懇談会を開催

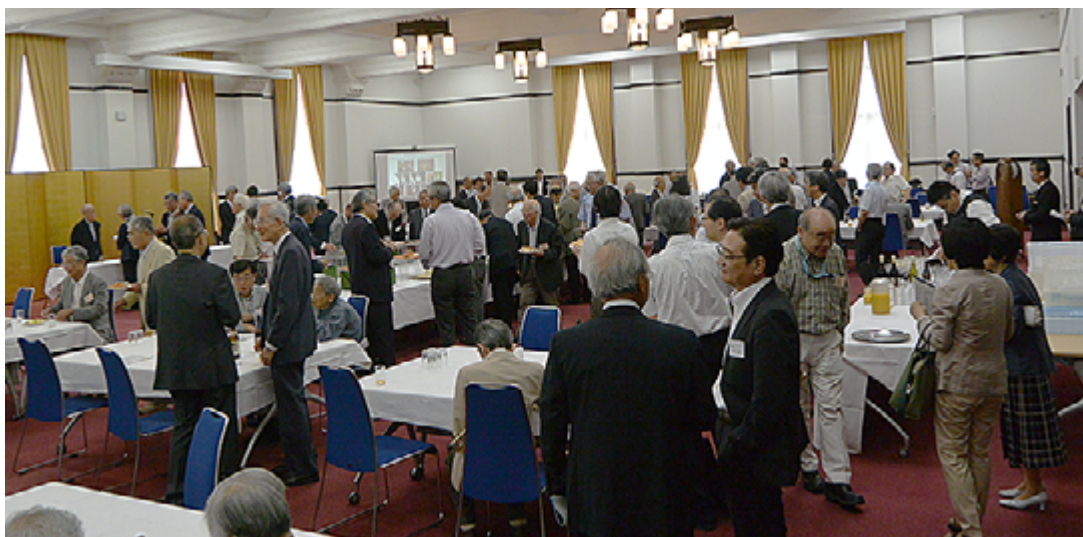
百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、6月21日（金）に名誉教授懇談会を開催しました。88名の名誉教授のほか、総長、理事、副学長、監事、部局長等合わせて115名が出席しました。

懇談会は、山極壽一 総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、井村裕夫 元総長による乾杯の発声で始まりました。

会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告等に話が弾み、盛会のうちに執り行われました。



乾杯の発声をする井村元総長 挨拶をする山極総長



懇談会の様子

（総務部（総務課））

[目次に戻る](#)

第6回京都大学－稲盛財団合同京都賞シンポジウムを開催

「京都大学－稲盛財団合同京都賞シンポジウム」（KUIP：Kyoto University-Inamori Foundation Joint Kyoto Prize Symposium）は、京都大学で2014年から毎年開催してきましたが、2018年からは会場を東京に移し、6回目となる本年は6月29日（土）に日経ホールで開催しました。

シンポジウムでは、「コンピュータービジョン－広く、楽しく、役に立つ技術の先端を語る」を統一テーマとして、2016年に京都賞先端技術部門を受賞された金出武雄 カーネギーメロン大学 U. A. and Helen Whitaker 冠全学教授を中心に、シュリー・K・ナイヤー コロンビア大学 T.C.Chang 冠教授、藤吉弘亘 中部大学工学部教授、西野 恒 大学院情報学研究科教授の4名が、一般市民、学生、研究者など合わせて450名の参加者に対し、それぞれの研究成果や最先端の話題などの興味深いテーマについて語りました。

講演後、中村裕一 学術情報メディアセンター長をモデレーターとして、講演者と山極壽

大学の
動き

一 総長によるパネルディスカッションが行われ、はじめに各講演者が現在の研究分野を目指したきっかけや将来展望を語り、次いで講演内容や事前に寄せられた質問を元に、「技術と人類の関わり」について語り合い、大変考えさせられる興味深いディスカッションとなりました。

聴講者からは、「Computer Visionへのアプローチが違う方が集まったの話はおもしろい」、「コンピューターセンシングの話ということで、さまざまな教訓や技術の実情を学ぶことができて良かったです」、「技術とヒトの関係性について、実生活でも考えていく必要があるなと感じました」などの感想が寄せられました。



パネルディスカッション



集合写真

(総務部(渉外課))

[目次に戻る](#)

令和元年度京都大学創立記念行事音楽会を開催

6月18日(火)の本学創立記念日を祝し、第63回京都大学創立記念行事音楽会「アナ・ヴィドヴィチ ギターリサイタル〜美しく、そして温かく心に響く磨き抜かれた演奏〜」を6月19日(水)に京都コンサートホールで開催しました。

今年度はギタリストのアナ・ヴィドヴィチさんが出演し、バリオス：『神の愛のほどこし』や『大聖堂』、タレガ：『アルハンブラの思い出』など、力強く美しいギターの演奏を披露いただきました。演奏後のアンケートでは、「深い音色に感動しました」、「ギター1本だけでさまざまな表現ができることに驚いた」といったさまざまな感想が寄せられました。会場に来られた方々は、アナさんが奏でるギターの音色に、しばしの癒しの時間を過ごされた様子でした。



【写真左】
アナさんの壇上挨拶
【写真右】
アナさんのギター演奏

(教育推進・学生支援部(厚生課))

[目次に戻る](#)

大学の
動き

令和元年度「京都大学総長賞」表彰式を挙行

学業・課外活動・社会貢献活動等において顕著な活躍をし、本学の名誉を高めた学生および学生団体を表彰する「京都大学総長賞」の令和元年度表彰式を7月1日（月）に挙行了しました。

今回の表彰は人命救助に貢献したアウトドアサークルDOWN HILLに対して特別に行われました。

表彰式では、はじめに学生表彰選考委員会委員長の川添信介 学生担当理事・副学長が選考結果を報告、引き続き、山極壽一 総長から表彰状等の授与が行われ、その後講評等を行いました。

代表者から救助についての説明が披露され、山極総長、川添理事・副学長からも質問が出るなど盛況のうちに終了しました。



代表者の若松君が表彰されている様子



受賞者および関係者

（教育推進・学生支援部（厚生課））

[目次に戻る ↗](#)

「京都大学機械研究会」が山極総長および川添理事・副学長を表敬訪問

「京都大学機械研究会」10名と松野文俊 工学研究科教授（顧問）が、7月1日（月）に山極壽一 総長および川添信介 学生担当理事・副学長を表敬訪問しました。

機械研究会は、5月26日（日）に東京・片柳アリーナで開催された「NHK学生ロボコン2019～ABUアジア・太平洋ロボコン代表選考会～」に出場、優勝し、8月25日（日）にモンゴルのウランバートルで開催される世界大会に日本代表として出場することを、山極総長と川添



大会当日の解説を行っている様子



受賞者および関係者

大学の
動き

理事・副学長に報告しました。

報告を受けた山極総長からは機械研究会に寄せる期待が述べられ、和やかな雰囲気の中、終了しました。

なお、NHK学生ロボコンの様子は7月15日（月）に放映されました。

（教育推進・学生支援部（厚生課））

[目次に戻る ↗](#)

第58回全国七大学総合体育大会（七大戦）の開会式が行われる

第58回全国七大学総合体育大会（七大戦）の開会式が、7月6日（土）に九州大学で行われました。

開会式には、山極壽一 総長、川添信介 理事・副学長、守屋和幸 体育会会長も参加し、昨年度優勝校の東北大学による優勝旗・優勝杯の返還や、今年度主管校である九州大学水球部主将による選手宣誓が行われた後、大会マスコット『Qボー』の紹介や、九州大学応援団およびチアリーディング愛好会ETOILESによる演舞演奏が披露されました。

開会式後には、文系食堂ビッグスカイでレセプションが開催され、各大学の総長によるユーモア溢れるスピーチや九州大学のサークルによる企画が披露されるなど、関係者一同なごやかな雰囲気の中、懇親を深める時間を過ごしました。



選手宣誓



体育会学生との集合写真

（教育推進・学生支援部（厚生課））

[目次に戻る ↗](#)



教育学部創立七十周年記念行事を開催

教育学部は、創立七十周年を記念して、記念式典、記念講演会および祝賀会を6月30日(日)に百周年時計台記念館において開催しました。

記念式典には、井村裕夫 元総長、尾池和夫 元総長、名誉教授、部局長、教育学部にゆかりの関係者など、約180名が参加しました。

まず、稲垣恭子 教育学研究科長が挨拶の中で、過去70年にわたる教育学部の歴史を支えた学内外の人びとへの感謝とともに、次世代の知と教育の継承に寄与しうる革新的な研究・教育拠点を目指していく旨を述べました。続いて山極壽一 総長、伯井美德 文部科学省高等教育局長(代読：吉成竜也 国立大学法人支援課課長補佐)、南川高志 文学研究科長、藤田裕



式典で挨拶をする稲垣教育学研究科長



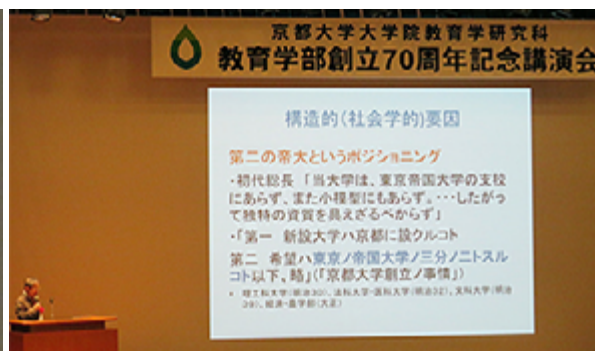
【写真左から】式典で祝辞を述べる山極総長、吉成文科省高等教育局国立大学法人支援課課長補佐(代読)、南川文学研究科長、藤田教育学部同窓会会長



式典の様子



記念講演会で講演する竹内名誉教授



記念講演会の様子

部局の
動き

之 教育学部同窓会会長よりそれぞれ祝辞がありました。

続いて記念講演会では、竹内 洋 名誉教授が『私説・京都大学論－「非」体制というダンディズム』と題して講演を行い、時折ユーモアを交えながら、一般市民を含む約270名の参加者を魅了しました。

祝賀会では、秋田喜代美 東京大学教育学研究科長の祝辞に続き、上杉孝實 名誉教授の発声で乾杯を行い、本学部生・教員ほかによる「故郷」演奏など、終始和やかな雰囲気の中、最後に森田正信 理事の挨拶により、盛会のうちに終了しました。



記念祝賀会での教育学部生ほかの演奏



記念祝賀会で挨拶する森田理事

(大学院教育学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

第23回リカレント教育講座「『心の教育』を考える－多職種・多機関の連携－」を開催

教育学研究科附属臨床教育実践研究センターでは、年1回、教育相談活動に携わる専門家（幼・小・中・高校教諭、養護教諭、児童養護施設関係者、心理臨床専門家等）を対象に、研修活動の一環として、リカレント教育講座を開催しています。不登校、非行、いじめ、発達障害など、現在の教育現場で大きな問題となっている現象を通じて、子どもの心や教育について深く考えることをねらいとしており、毎年、全国から熱心な教師や臨床心理士等専門家の参加を得ています。



シンポジウムの様子



第23回となる今回は「多職種・多機関の連携」を全体テーマとして8月18日(日)に開催し、79名が受講しました。午前には、教師と臨床心理士(スクールカウンセラー)双方の立場で学校教育現場に携わってこられたご経験を有する2名のシンポジストを迎え、「多職種・多機関の連携」をテーマにシンポジウムを行い、午後には分科会に分かれて事例研究を行いました。

シンポジウムでは2名のシンポジストから、多職種・多機関との連携の重要性とその難しさや、教育相談体制の中核的人材の育成を図ることの大切さなど幅広い視点からの話があり、後半、受講者を交えたディスカッションを行いました。

事例研究では、教育現場における個別事例を素材として受講者と講師が活発に意見を交わしました。参加者からは、「さまざまな職種の方の考え方や意見を聴くことができ、視野が広がったと感じました」、「正面からの話し合いの大切さを再認識しました」などの感想が寄せられ、大変好評でした。

教育現場における心の問題についてじっくりと検討していく場として、来年度以降も本講座を引き続き開催していく予定です。

(大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター)

[目次に戻る ↗](#)

第20回京大病院 iPS細胞・再生医学研究会を開催

医学部附属病院は、7月26日(金)に、第20回京大病院iPS細胞・再生医学研究会を芝蘭会館で開催しました。同研究会は、京大病院でのiPS細胞、ES細胞および体性幹細胞などを用いた再生医学研究の向上および成果の普及を図り、医療の発展に貢献することを目的として2009年11月に発足しました。

研究会では、宮本 享 病院長の開会挨拶後、戸口田淳也 iPS細胞研究所副所長が「iPS細胞を活用した病態解明から創薬」、高橋 淳 iPS細胞研究所副所長が「iPS細胞を用いたパーキンソン病治療」と題して、それぞれ学術講演を行い、参加者は最新の研究成果について熱心に聞き入りました。

また、講演後の質疑応答では活発な議論が展開され、研究会は盛会のうちに終了しました。

なお、本研究会は今回をもって終了し、次年度より京都大学iPS細胞・再生医療研究会として新たにスタートを切ることとなります。



開会挨拶を行う宮本病院長



学術講演を行う戸口田副所長



学術講演を行う高橋副所長

(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)



総合生存学館（思修館）に凸版印刷アートイノベーション 産学共同講座を設置

総合生存学館（思修館）では、凸版印刷株式会社とともにアートの産業応用を目指し、土佐尚子 総合生存学館特定教授による日本の美をテーマとしたアートの社会実装に向けて、「凸版印刷アートイノベーション産学共同講座」を今年5月から設置し、7月8日（月）に記者会見を行いました。

本産学共同講座では、2022年4月までの3年間に、アートと最先端テクノロジーを組み合わせ、イノベティブな社会的価値創造を目指し、同特定教授の日本の美・文化を切り口とした「Invisible Beauty: 先端技術で見える自然の美」をテーマにしたメディア・アートと、凸版印刷株式会社が持つ表現技術を組み合わせ、アートの社会実装に取り組みます。

具体的には、アナログな物理的世界の色彩や形状を、先端技術で捉えてデジタル表現するアート表現から新しい価値の創造に挑みます。また、そのアート表現を用いてさまざまな社会実装を行い、新しい工業意匠向け商材から都市開発まで産業応用を目指します。詳細は、こちらのURLから閲覧できます。

<http://tosa.gsais.kyoto-u.ac.jp/>

■背景

土佐特定教授は、アート・カルチャー・テクノロジーを兼ね備えた人財や組織がイノベーションを起こすことができるとした「アートイノベーション」の先駆者であり、アートとテクノロジーで構成される現代美術が社会イノベーションを生み出す仕組み+日本の美・文化を切り口とした研究を進めています。その中で、アートイノベーションを用いて、資本化できていない芸術文化資源を方法論により経済価値に変換すべきという考えのもと、物理現象としての美を発見するアーティスト、発見した美を数式化する学者、数式化された美をコンピューターでデータ化する技術者の3者連携が必要と提唱しています。

凸版印刷株式会社は、印刷技術で培われたカラーマネジメント技術や高精細な画像データ処理技術、形状を精確にデジタル化する計測技術といった先端表現技術を活用し、4K8K映像



7月8日に行われた記者会見（左から、凸版印刷の中尾光宏 常務、大久保伸一 副社長、京都大学の山極壽一 総長、寶 馨 総合生存学館長、土佐同特定教授）



表現やバーチャルリアリティ（VR）、デジタルアーカイブなどのコンテンツソリューションを提供しています。また社会的価値創造企業として、既存の枠組みから脱却して新たな価値を生み出すイノベーションの創出という社会全体の要請に対しても、取り組みを強化しています。

このたび両者は、アートと先端映像表現を切り口に社会をイノベートしていくことを目指し、両者のリソースを有効に活用できる枠組みとして、この共同講座の開設に至りました。

■共同講座の概要

- ・名称：凸版印刷アートイノベーション産学共同講座
- ・設置場所：京都大学大学院総合生存学館
- ・参画機関：凸版印刷株式会社
- ・研究期間：2019年5月～2022年4月

（大学院総合生存学館）

[目次に戻る ↗](#)

総合生存学館（思修館）がリップル社とブロックチェーン・暗号資産の学術研究のため提携契約を締結

総合生存学館（思修館）とリップル社 University Blockchain Research Initiative（米国）は、グローバル問題の解決策提案のためのブロックチェーン・暗号資産の学術研究のため、提携契約の締結を7月29日（月）に発表しました。

今回の提携により、教員、博士研究員、大学院生、学部生を含んだ部門横断的な共同研究と学術的な活動が行われます。総合生存学館（思修館）では、池田裕一 総合生存学館教授を中心に工学やビジネス、公共政策などを含む学際的なアプローチでさまざまなグローバル問題の解決策を提案するために、ブロックチェーンの将来的な応用に関して、ワークショップや研究プロジェクトを実施します。ここでは、複数の大学院生が、移民労働者の送金へのブロックチェーン技術の応用、難民のデジタルIDの管理、京都の伝統産業のサプライチェーンの管理に関する研究を行います。また本提携には兵庫県立大学大学院シミュレーション学研究科の藤原義久 教授のグループも参加して、暗号資産の取引ネットワーク構造の解明等の課題について共同研究を進めます。



リップル社との会合の様子

（大学院総合生存学館）

[目次に戻る ↗](#)



総合生存学館（思修館）において欧州復興開発銀行総裁を迎え、国際教育セミナーを開催

欧州復興開発銀行（EBRD）のスマ・チャクラバルティ総裁が、3年ぶりに日本を公式訪問する機会に京都大学を表敬訪問し、本学とEBRDの今後の関係強化、京都大学欧州拠点とEBRDとの交流促進等についての意見交換を、7月30日（火）に行いました。

また同日に、東一条館大講義室（201）において、総合生存学館（思修館）の主催で、2019年第2回国際教育セミナー「欧州復興開発銀行（EBRD）の概要と拡大を続ける業務、求められる人材について」を開催し、将来国際的に活躍が期待される学生に、EBRDの概要や活動状況等を説明するとともに、EBRDが求める人材や資質等について総裁から直接説明があり、学生と総裁の活発な質疑応答が行われました。今後もEBRDから定期的に講師を招き交流を続けて行く予定です。



懇談会の様子



京都大学側の出席者



国際教育セミナーを司会した スマ・チャクラバルティ総裁 国際教育セミナーの様子
河合江理子 総合生存学館教授



質疑応答の様子



スマ・チャクラバルティ総裁を囲んで

（大学院総合生存学館）

[目次に戻る ↗](#)



サイエンスアゴラ in 京都・京都大学《超》SDGs シンポジウム「資源・エネルギーと持続可能性」を開催

6月27日(木)に、百周年時計台記念館にて、サイエンスアゴラ in 京都・京都大学《超》SDGs シンポジウム「資源・エネルギーと持続可能性」を開催しました。午前10時～午後8時にわたって開催した本企画には、延べ800名の参加があり、いずれの企画も活気あふれるものになりました。

午前10時の開会にあたり山極壽一 総長のビデオメッセージが流れ、続けて北野正雄 理事・副学長の挨拶があり、シンポジウムは和やかにスタートしました。午前10時10分～午後0時30分に行われたパネルセッション「資源・エネルギー問題を起点に、パートナーシップでSDGsに挑む」には、末吉竹二郎 気候変動イニシアティブ/WWFジャパン代表、門川



午前のパネルセッション登壇者は全員和装で参加しました

大作 京都市長、山下良則 株式会社リコー代表取締役社長、山本昌宏 環境省環境再生・資源循環局長、高瀬幸子 近畿経済産業局通商部企画官、真先正人 国立研究開発法人科学技術振興機構(JST) 理事、諸富 徹 地球環境学堂教授が参加し、酒井伸一 環境科学センター教授のコーディネートにより、充実した情報交換とエッジの利いたディスカッションが展開されました。続いてステージ上では、学生による「京都大学プラヘラス宣言」が行われ、見事な発表に会場は大きな拍手に包まれました。



午前のセッションの締めくくりとして、学生による「京都大学プラヘラス宣言」が行われました

午後は、次の通り、複数の企画が並行して行われ、いずれも熱気あふれる会場となりました。

午後1時～午後4時15分

地方創生 SDGs 官民連携プラットフォームJST 地域産学官社会連携分科会

午後1時～午後2時30分

企業・団体向け「SDGs 入門」

午後1時30分～午後2時30分

国際WS「レジリエントな低炭素社会の構想」



午後2時30分～午後4時15分

SDGs 事始めワークショップ

午後4時30分～午後5時45分

SDGs に関するもやもや感を少しでも解消!「超SDGs 道場」

午後6時～午後8時

超SDGs ネットワーキングディナー

【関連リンク】

・ エコ〜るど京大「京都大学環境管理情報サイト」

<http://eco.kyoto-u.ac.jp/>



超SDGs道場には、子どもから大人まで、さまざまな人が参加し、意見をぶつけ合いました

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る ↗](#)

高大連携事業「京大 森里海ラボ in 芦生」を実施

7月27日(土)～28日(日), 森里海連環学教育研究ユニットおよびフィールド科学教育研究センター主催による高大連携事業「京大 森里海ラボ in 芦生」を, 総長裁量経費および日本財団の支援により芦生研究林において実施しました。連携高等学校9校から高校生25名, 引率教諭9名を含む総勢51名が参加しました。



オオカツラの木の前で説明を受ける



モリアオガエルの巣の下でオタマジャクシが落ちてくるのを待つイモリの様子を見る

部局の
動き

1日目は、台風が迫る中実施も危ぶまれましたが、雨は降り続いたものの少し収まってきたので、当初の予定を短縮して観察を行うこととし長治谷に向かいました。芦生研究林長の石原正恵 准教授から、オオカツラやシカ害、シカ柵の話聞き、実際にシカ柵の中ではさまざまな植物が豊富に茂っているところを目の当たりにし、シカの食害が植物多様性に大きな影響を与えているところを見ることができました。

講義室に戻って、グループワークに取り組みました。事前に渡しておいた宿題「森里海に関する課題の抽出」に基づき、森里海マップに課題を貼り付けていきました。それぞれが出した課題について意見交換を行い、課題同士のつながりや、森里海の連環を分断する原因について整理していきました。

2日目は、まず、いくつかの高校から普段行っている課題研究等の成果を発表してもらい、ユニットの研究者からコメントを届けました。



1日目グループワークの様子



課題研究等の発表



自由時間に花火に興じる高校生たち



高校の先生方との懇談会



2日目グループワークの様子



グループワークの発表

部局の
動き

引き続き、前日のグループワークの仕上げを行ったうえで、各グループから検討結果の発表があり、ユニット関係者から質問やコメントを寄せました。

最後は、この2日間のプログラムについて修了証を授与する修了式を行いました。

芦生研究林内の観察が雨のため短縮せざるを得なかったのは大変残念でしたが、アンケートでは、「期待以上だった」、「硬い感じかと思っていたが意外と自由で面白かった」、「すごく面白い人たちがいた」、「本当に自由で自分たちの思うように話し合えた」、「勉強なのにこんなに嫌な感じがしないことに驚いた」などの感想が寄せられ、満足度は半数以上の参加者が100点をつけていました。中には、1,000点をつけている参加者が2名おり、有意義なワークショップとなったことがうかがえました。



修了証授与



最後に全体で記念写真

(森里海連環学教育研究ユニット)

[目次に戻る](#)

高等研究院 iCeMS が、台湾中央研究院と合同シンポジウム・台湾オフィス開設セレモニーを開催

高等研究院物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS=アイセムス) は、6月24日(月)～25日(火)に、台湾中央研究院 (Academia Sinica) にて合同シンポジウムを開催し、iCeMS台湾オフィス開設セレモニーを行いました。

本学からは稲葉カヨ 理事・副学長、北川 進 高等研究院特別教授・iCeMS拠点長、鈴木 淳 iCeMS教授・副拠点長をはじめ18名の研究者・職員が参加し、台湾からは中央研究



開設セレモニーでの挨拶 (左から) 稲葉理事・副学長、Liu 副総裁、北川拠点長、連携コーディネーターのTzu-Ching Meng 教授、鈴木教授

部局の
動き

院のFu-Tong Liu 副総裁と研究者が参加されたほか、各国立大学、国立研究機関代表者を来賓に迎えての開催となりました。

中央研究院は、台湾総統府直轄の最高学術研究機関で、傘下には31の研究所やセンターがあり、自然科学、人文・社会科学の各分野での世界トップレベルの研究、人材育成、学術振興を行っています。

iCeMSはこのたび、台湾の研究機関・大学との研究連携強化のため、国立バイオテック・リサーチパーク（NBRP）に台湾オフィスを開設することとなり、中央研究院との合同シンポジウムを2日間にわたって開催、その中で、台湾オフィス開設の記念セレモニーを行いました。

今後、この台湾オフィスが京都大学の台湾におけるハブとして機能し、台湾の研究機関・大学との共同研究を加速させること、また、中央研究院および産官学各界と、さらには京都大学同窓生との交流のハブとして、広く台湾全体との連携が広がっていくことが期待されています。

次のステップとしてiCeMSは、中央研究院内に現地運営型ラボ「統合バイオシステムセンター」の開所も予定しています。ラボでは、京都大学iCeMSならびに台湾中央研究院の強みを活かした分子センシングの研究を行い、新しい分野を切り開いていく予定です。

7月23日（火）、この現地運営型ラボは、京都大学 On-site Laboratory に認定されました。



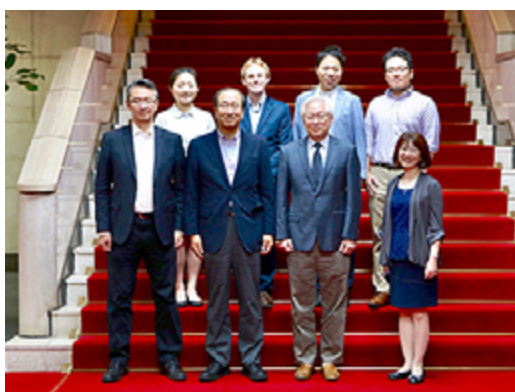
北川拠点長と Liu 副総裁



台湾オフィス開設セレモニー



共同研究に向けてのブレインストーミング



台湾行政院訪問



科学技術省（MOST）訪問



【関連リンク】

- ・台湾中央研究院
<https://www.sinica.edu.tw/en>
- ・On-site Laboratory を新たに6件認定しました。(2019年7月23日)
http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/events_news/office/kikaku-joho/kikaku/news/2019/190723_1.html
- ・高等研究院 物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS)
<https://www.icems.kyoto-u.ac.jp/ja/>

(高等研究院)

[目次に戻る ↗](#)

寸言

「新人類の皆さんへ」

乗京 正弘



先日、澁野日向子さんが「全英女子オープン」優勝という、日本女子選手として樋口久子さん以来42年ぶりのメジャー制覇を達成しました。日本国中が興奮し、今もその過熱ぶりはトーナメントを盛り上げています。

澁野選手が優勝を決めた瞬間、テレビ解説の樋口さんが「新人類ができましたね」と、お菓子をほお張ったりギャラリーとハイタッチする姿も含めて驚嘆していました。特に、最終ホールで優勝を決めたパットは、失敗を恐れない攻めの姿勢が溢れており、私も学生時代に関西学院大学に挑んでいったアメリカンフットボール漬けの時と比べ「凄い！」と声に出したぐらいでした。

「新人類」とはいかにも古臭い言い方ですが、今の現役学生に近い年代の人には皆その素養が備わっていると思います。野球盤や人生ゲームなどをゲームとして遊んできた我々年代とICTをゲーム感覚で使いこなせる差がそこにあるからです。

弊社では内々定者と社長との懇談会を開催し、内々定者10人程度と私が1時間ぐらいの時間をかけ、会社のことを含め内々定者からのいろいろな質問に答えるという機会を設けています。

「社長の一日は？ 休日の過ごし方は？」とか「今まで一番やらかしてしまったことは？」とか「異性との出会いはありますか？」などいろいろな角度からの質問があり、最初は固い雰囲気も途中からは本音爆発といった場になり「最初は緊張していたが、とても楽しかった。」と言ってもらっています。

ただ、最近なぜか違和感を覚えるようになりました。

数年続いている懇談会での質問が、かなり限定されてきているのです。

その質問を、失敗しない固い質問や想定問答集からの質問だと感じたのかもしれない。

原因は、内々定者の「自らの規格化」「ルールの厳守」による個性の封じ込めにあると感じたからだと思います。

自分はこの程度の成績なのでこれぐらいの生活が普通であるとか、ルールさえ守っていればそれなりの生活ができるので、自分を主張することもないという考え方です。

そこで、懇談会の最後に「皆さんに期待すること」として、次のことを話すようになりました。

1. 卒業に向けて、単位の不足している人は必ず取得して卒業してください（学生の本分）
2. 卒業まで時間の余裕のある人は、専門外の見聞を広げてください（教養を広める）
3. 入社されましたら、まずこの会社の仕事のやり方を理解してください（観察）
4. 今までの仕事のやり方が絶対ではないので、なにか無駄だと感じるがあれば教えてください（報告）
5. 皆さんの時代の仕事のやり方を創り出してください（創造）

以上の5点です。



素晴らしい環境で育ってきた「新人類」の皆さん。

まず「教養」を広め「柔軟」で「多様」な人間力を高めてください。

そして社会人になる前に植え付けられた「ルールの厳守」や「自らの規格化」を解き放ち、早く本性を現し旧態依然とした社会を自らの新しい社会に変えていってくれることを期待しています。

(のりきょう まさひろ、飛鳥建設株式会社代表取締役社長、
昭和 55 年大学院工学研究科修士課程修了)

[目次に戻る ↗](#)

随 想

ビッグデータ学習と AI
— レンブラントの次回作 —

名誉教授 田中 克己



世界中でAI旋風が吹き荒れている。昨今喧伝されているAIは、仕掛け的には、大量のデータ（「ビッグデータ」）を多層のニューラルネットワークを用いて「深層学習」するものであり、この技術が、画像認識/生成、言語理解/生成、情報分析などの分野で注目を集めている。

例えば、画家レンブラントの過去のすべての絵画データを深層学習して、レンブラントの「次回」作を生成するThe Next Rembrandtプロジェクト^{※1}が有名である。このプロジェクトの機械学習技術そのものは、さほど新しい技術ではないが、実際に生成された絵画（次回作）の品質が極めて高いことが大変興味深い。コンピュータが、いよいよ、このような大量のデータを機械学習処理できる性能を持ち始めたという点も見逃してはならないことだと思う。このプロジェクトの成功により、従来のデータアーカイブの存在価値が飛躍的に向上するものと思われる。なぜなら、アーカイブされた「過去のデータを学習した上で、新たなデータを生成するメカニズム」ができたからである。新たなデータ生成するAIの別の例として、米国automatedinsights社^{※2}のWordSmithというニュース記事を自動生成するソフトウェアがある。このソフトは、過去のニュース記事データを学習した上で、新たなニュース記事を自動生成できる。ここでも、驚くべきことは、WordSmithの機械学習技術そのものではなく、AP通信が実際にこのソフトを用いて、毎日かなりの数のニュース記事を自動生成し配信しているという事実である。

これらの機械学習技術の例には共通点がある。ビッグデータを学習することで新たなデータを産み出せるという点である。AIによって生成されたデータも、後に、ビッグデータとして学習し得るという点である。AIが生成したデータをもさらに学習するというのは、いかがであろうか？これによりAIが、ますます、ステレオタイプのデータを生成する可能性がある。

AIに関わる社会的に大きな問題として、機械学習するデータやAIが生成したデータの知的財産権の問題がある。例えば、The Next RembrandtプロジェクトやWordSmithが生成した絵画やニュース記事はそもそも著作物なのだろうか。著作権法では、アイデアに基づく表現が一つしか無い場合は、その表現は著作物とは見なさないというマージ理論があり、これによれば、AIが生成するデータ（表現）は、そもそも、著作物ではないという解釈になるのではないだろうか。さらに、著作権法では他人の著作物データを解析のために複製を作ることは認められているものの、データの機械学習はデータの解析以上の処理をしているのではなかろうか。

※1 <https://www.nextrembrandt.com>

※2 <https://automatedinsights.com>

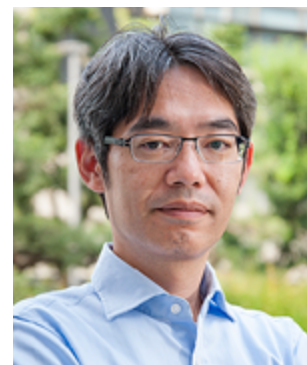
（たなか かつみ、平成29年退職、元大学院情報学研究科教授、
専門は社会情報学、データベース）

目次に戻る ↗

洛 書

医学研究科に学内異動して

竹内 理



現在、私は医学研究科医化学分野で、免疫の調節システムに関する研究、および医学生へ生化学の教育を行っている。

私は大阪大学医学部を卒業し、大阪大学微生物病研究所で勤務したのち、2012年に京都大学ウイルス研究所（現ウイルス・再生医科学研究所）教授として研究室を主宰、昨年10月に医学研究科に研究室ごと異動した。新たに着任した医化学教室は、開設後120年の伝統があり、これまで本庶 佑先生、早石 修先生を始めとした日本を代表する研究者が主宰されてきた。先日、医化学の同窓会で本庶先生のノーベル賞受賞祝賀会を開催させていただいたが、全国から錚々たる医化学教室出身の先生方が駆け付け、盛大なものとなった。このような新たな環境で、研究、教育を行う機会をいただいたことに、身の引き締まる思いである。

さて、免疫とは病原体感染を検知して、炎症を起こし、排除するシステムであるが、脊椎動物になって登場した獲得免疫と、昆虫などから広く保存された自然免疫に大きく分けることが出来る。私は、自然免疫が病原体を検知する機構について研究を行ってきた。免疫系はその暴走を防ぐために、多くの調節システムを有している。本庶先生が発見されたPD-1は、獲得免疫のブレーキとして働き、これを抑制することで癌に対する免疫を高め新たながん免疫療法として高い効果を示すことが分かり、本庶先生のノーベル生理学・医学賞の受賞対象となった。しかしながら、免疫系には、PD-1に加え多くのブレーキが存在する。私は、自然免疫細胞において、遺伝情報の担い手であるメッセンジャー RNAを分解し、その量を調節することで、自然免疫応答を抑制するブレーキが存在することを見出した。このブレーキがうまく働かなくなると、モデル動物においては免疫の過剰な活性化による自己免疫疾患を発症することが分かっている。現在、RNAを介した免疫調節の仕組みに特に興味を持ち、精力的に研究を進めている。

7年前にウイルス研究所で研究室を構えた際、6人でスタートした研究室も、総勢20名を超えるほどとなった。研究室メンバーも、医学部出身者に加え、理学部や薬学部、工学部、また多くの国からの留学生など、バラエティーに富むものとなってきた。研究室立ち上げ当初、京都大学で何も分からなかった私に多大なサポートを頂いたウイルス・再生医科学研究所や医学研究科の先生方に感謝したい。幸いにも、優秀でモチベーションに溢れた研究室スタッフや大学院生、学生に恵まれているが、これも、京都大学というインキュベーターで、自由に研究することができたからあることは間違いない。研究室の引っ越しは、たった数百メートルとはいえ予想以上に大変な作業であったが、心機一転、どうしたら面白く、そして時には役に立つ研究が出来るか、模索しながら前に進んで行きたい。

（たけうち おさむ、大学院医学研究科教授、専門は免疫学、分子生物学）

[目次に戻る ↗](#)

話題

令和元年度総長杯（卓球大会）を開催

6月28日（金）に開催された令和元年度総長杯卓球大会には過去最多の20チームが参加しました。当日は例年通りの蒸し暑さでしたが、会場となった総合体育館（地下1階卓球場）は白熱した試合展開と熱のこもった声援で大きな盛り上がりを見せました。決勝戦は、医学研究科「Gウェーブ」（代表者：今井敦宣）チームが、数理解析研究所・基礎物理学研究所の合同チーム「数理解析・基礎物理学卓球所」（代表者：岸本典文）を2対1で下し、見事に2連覇を遂げました。試合終了後の表彰式では、宇野圭助 総務部人事課福利厚生室長から優勝、準優勝チームに賞品が贈られました。



優勝した「Gウェーブ」チーム



準優勝した「数理解析・基礎物理学卓球所」チーム

（総務部（人事課））

[目次に戻る](#)

北部構内「子ども見学デー 2019」を開催

7月26日（金）、北部構内において「子ども見学デー 2019」を開催しました。

「子ども見学デー」とは、子どもたちが親の職場を見学し、親子のふれあい・理解を深める機会とするもので、ワークライフバランスを推進する北部構内独自の取り組みです。開催は今年で6回目となり、北部構内では毎年恒例のイベントです。北部構内で勤務する全教職員の子どもたち（小学生）が対象で、その兄弟姉妹の未就学児を含めた3歳から12歳の23名が参加しました。

今年のテーマは「京都大学を探検しよう!」。子どもたちが探検隊員となり、馬術部厩舎、理学研究科の化学実験室、農学研究科の昆虫実験室等を巡りました。

馬術部厩舎では学生部員より馬の説明を受け、餌やり体験を行い、化学実験室では阿部邦



餌やり体験



クイズに挑戦

話 題

美 技術専門員らの指導による酸とアルカリの化学実験を行いました。最後に、昆虫実験室では松浦健二 農学研究科教授の説明を聞いた後、道しるべフェロモンに沿ったシロアリの行進やシロアリの体内に生息する原生生物の観察を行いました。

当日は大変気温の高い日でしたが、子どもたちは大きい馬や試験管の色の変化、シロアリの巣に興味津々でした。修了式では一人ずつ自分の探検結果を報告し、上原孝俊 北部構内事務部長から修了証が手渡されました。夏の暑さに負けない、子どもたちの輝く笑顔を中心に、保護者の教職員、スタッフと記念撮影をして、「子ども見学デー 2019」は幕を閉じました。親の職場について子どもたちの認識が深まる良い機会となりました。



試験管の色の変化を観察



道しるべフェロモンをたどるシロアリ



上原事務部長による修了証授与



親子で集合写真

(北部構内事務部)

[目次に戻る](#)

訃報

このたび、森岡茂樹 名誉教授、渡部良久 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

森岡 茂樹 名誉教授

森岡茂樹先生は、7月11日に逝去されました。享年88。

先生は、立命館大学理工学部（二部）在学中の昭和26年5月に京都大学工務員に採用、昭和33年3月退職後、同年4月京都大学大学院工学研究科修士課程に入学、昭和35年3月同課程を修了し、同年4月立命館大学理工学部助手、昭和38年10月大阪大学基礎工学部機械工学教室講師、昭和42年3月同助教授昇任、昭和53年4月筑波大学構造工学系教授昇任、その後、昭和63年4月京都大学工学部航空工学教室に配置換となり推進工学講座を担当されました。この間、昭和41年3月に京都大学工学博士の学位を授与されました。平成6年6月大学院重点化改組により航空宇宙工学専攻航空宇宙基礎工学講座を担当され、平成7年3月停年により退職されました。平成6年5月に筑波大学名誉教授、平成9年3月には京都大学名誉教授の称号を受けられました。



先生は、気体力学、電磁流体力学、混相流体力学において顕著な業績を残され、その発展に寄与されました。特に、電磁流体力学の研究では、当時中心的研究がなされていたNASAエームス研究所へ研究員として招かれ、また、フランス国グルノーブル力学研究所との共同研究など、日本を代表する研究者として活躍されました。また、混相流体力学の研究では、パリ第6大学へ招へい教授として招かれ、教育などにも尽力されました。さらにこれら業績に対して、昭和58年に米国原子力学会第2回原子炉熱流動国際会議（NURETH-2）最優秀論文賞を受賞されました。これらの研究は、53篇の欧文論文、3篇の和文論文と『気体力学』をはじめとする7冊の著書にまとめられています。また、昭和62年度および平成2年度に日本流体力学会副会長を務められ、特に流体力学ハンドブックや流体力学シリーズの立案および編集など、出版事業活動を中心にその運営に貢献され、平成21年2月には日本流体力学会名誉会員の称号を受けられました。

先生は、これら一連の教育研究活動、学界活動により、平成26年4月瑞宝中綬章を受け、令和元年7月正四位に叙されました。

（大学院工学研究科）

[目次に戻る ↗](#)

訃報

渡部 良久 名誉教授

渡部良久先生は、6月16日に逝去されました。享年87。

先生は、昭和31年京都大学工学部燃料化学科を卒業、昭和33年同大学大学院工学研究科修士課程燃料化学専攻を修了し、昭和36年4月京都大学助手に採用され、同43年講師、同44年助教授を経て、昭和56年教授に就任、石油変換工学講座を担当し、同61年4月より工学部附属重質炭素資源転換工学実験施設教授を兼任されました。この間、昭和40年12月に京都大学工学博士の学位を授与されました。平成7年3月に京都大学を停年にて退職し、同年4月に京都大学名誉教授の称号を受けられました。

本学退職後、4月から近畿職業能力開発大学校附属滋賀職業能力開発短期大学校校長を務められ、平成12年3月に退職されるまで、地域の産業界で活躍する実践的なものづくり人材の育成に努められました。

先生は、有機工業化学、エネルギー化学、および有機金属化学の分野において、顕著な研究成果を挙げられました。特に、カルボニル鉄酸塩（化学式は $\text{K}[\text{HFe}(\text{CO})_4]$ ）の合成法およびその反応性を明らかにした研究成果は、後のコールマン試薬（化学式は $\text{Na}_2[\text{Fe}(\text{CO})_4]$ ）の誕生に大きく貢献しました。さらに、鉄カルボニル錯体の基礎から応用に至る広範な研究により、未利用炭素資源として重要な石炭の直接および間接液化反応を達成されました。また、先生は、近年の有機工業化学および有機合成化学の発展に大きく寄与したルテニウム錯体の触媒機能に関する先導的な研究を行われました。これらの研究成果は、272篇の学術論文にまとめられ、国内外で高く評価されています。

また、昭和61年10月に第1回が開催された「日中炭素資源有効利用に関するシンポジウム」、および本年3月の開催で第14回を迎えた「日韓有機金属シンポジウム」の立ち上げにわが国を代表して尽力され、日・中・韓、およびタイ王国との学術振興・学術連携に貢献されました。これらの業績により、先生は平成元年2月有機合成化学協会賞（学術的）、同2年2月燃料協会賞、および同5年5月石油学会賞を受賞されました。さらに、石油学会理事、日本エネルギー学会理事、および日本化学会近畿支部長などの要職を歴任し、学会の発展に尽力されました。先生は34年にわたり、研究者であるとともに、研究を通じて、アカデミアや産業界で活躍する多くの人材を育成された教育者としての役割を尽くされました。

先生は、これら一連の教育研究活動、学界活動により、令和元年6月従四位に叙され、また、瑞宝小綬章を受けられました。

（大学院工学研究科）

[目次に戻る](#)

